オーストラリア
History of Australian Equitation
馬術の変遷

本誌連載「世界馬術展望」の執筆者、マックス・E・アマン氏に
オーストラリア馬術界の来し方について書いてもらった。

Text by Max E. Ammann

オーストラリアの障害飛越について初めて聞いたのは1950年代前半のことだった。それは馬とライダーの一葉の写真だった。かなり変わったスタイルで、高跳びのフェンスを越えていたのだ。そのキャプションには7フィート（約210センチ）越えとあった。その数年後、1956年、4人のオーストラリア人がオリンピックに参戦するためヨーロッパにやって来た。障害飛越の選手は印象に残らない成績だった。しかし、総合馬術のチームは4位を獲得し、世界を驚かせた。

そして4年後、オーストラリアの総合馬術チームが再びやって来た。彼らは1960年のローマオリンピックで大評判となった。サラダディズに騎乗したローレンス・モーガンは個人の金、アウアソロ騎乗のニール・ラヴィスは銀、そしてビル・レイクロフトを含めたチームが金。オーストラリアの4番目のライダー、ブライアン・クラーゴはクロスカントリーを終えた時点で2位につけていた。しかし、障害飛越の前のベットチェックで棄権を余儀なくされる。このとき、モーガンもレイクラフトもともに40歳を超えており、ほかのふたりも30代だった。ローマでの活躍でオーストラリアの総合馬術は世界的にその名を高め、92、96、2000年と続けて金メダルを獲得した。前回、08年の北京オリンピック（会場は香港）では銀メダルを獲得している。国際馬術の場で卓越した地位を築いたオーストラリアの頂点は1986年にバロッサバレーの北アデレードのガウラーで開催された世界チャンピオンシップだ。

ローマでの活躍でオーストラリアの総合馬術は世界的に知られ、その名を高め、92、96、2000年と続けて金メダルを獲得した。

障害飛越についてはなかなか世界的な注目を集めるにいたらなかった。ようやく64年の東京オリンピックでボンヴェールに騎乗したジョン・ファーヘイは4位につけた。それもジャンプオフでの敗退のため銅メダルを逃したのだ。76年のモントリオールではミスターデニスに乗ったガイ・クレイトンは5位に入賞した。オーストラリアの障害選手の活躍は組織がしっかりしているワールドカップのパシフィックリーグの方が顕著だ。

70年半ば、オーストラリアで農業を営むデッド・ドワイヤーはオーストラリアン・ホース・ショーのコースデザイナーと審判も務めており、「ショー・ジャンピング・ダウン・アンダー」と題する本を著した。78年に私は彼と会い、オーストラリアに新しいワールドカップを創設してはどうかと勧めた。そしてこれが79年に始まり、2年目にあたる翌80年、バルティモア大会でオーストラリアから2人のライダーが最終戦まで残った。それ以来、ほぼ毎年オーストラリアは最終戦まで闘いを進めるようになる。86年にビッキー・ロイクロフトの7位というオーストラリア勢としては最高の成績を残した。

ワールドカップのパシフィックリーグでは始まってから数十年間、オーストラリアとニュージランドのライダーは国として独立せず同じ枠に入っていたが、90年初め、ついにそれぞれの国が独自にリーグを持つようになった。オーストラリアリーグは、ブリスベンからシドニー、キャンベラ、メルボルン、アデレード、パースまでと、全土を網羅し、毎年15の競技会が開かれている。オーストラリアのほとんどの競技会は農業展で行われている。そこでは馬や牛、その他の動物やタマネギ、トマトなどの農作物の品評会が開かれ、賞を与えるといったイベントを行うのだ。

最初のこのリーグの優勝者は80年のマリアン・ギルクリストだった。そして、ビッキー・ロイクロフトは87、96、98、2002年と4回優勝している。最近、オランダのジャン・トップスと結婚したオーストラリア生まれのエドウィナ・アレクサンダーは現在世界のトップライダーのひとりだが、若くしてオーストラリアリーグを制し、その後8回優勝している。

オリンピックの馬場馬術では、2000年にクリスティ・オートレイ・ニストがファイナルで9位となったのが今のところの最高成績だ。